

もる、冥途への文など、婦女の説に落入輩、此所にあまた是を置、此邊蚤休あり、葉草の名なり俗にばんでん草と云、是より奥の方へ予十町計分入といへども、篠竹のみ多有て行事を得ず、爰より歸る、又山を段々分登り、本道寺口湯殿山月山衣類改所、羽黒山裝束場あり、何れも此邊大難所也、牛の首と云所に石地藏有、此邊直根上人參、その外蚤休あり、羽黒山道荒澤常火堂あり、紀州熊野山と同く、高野山此燒日本三ヶ所の火と云、如何成故にや、その由來を知らず、

〔奥の細道〕六月三日、羽黒山に登る、圓司左吉と云者を尋ねて、別當代會覺阿闍梨に謁す、南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやがにあるじせらる、四日、於本坊俳諧興行、

ありがたや雪をかをらす南谷

五日、權現に詣づ、當山開闢能除大師は、いづれの代の人と云事をしらず、延喜式に、羽州里山の神社と有書寫黒の字を里山となせるにや、羽州黒山を中略して、羽黒山と云にや、出羽といへるも、鳥の毛羽を、此國の貢物に獻ると風土記に侍るとやらん、月山湯殿を合せて三山とす、當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯か、げそひて、僧坊棟を並べ、修驗行法を勵し、靈山靈地の驗効、人貴び且恐る、繁榮長にして、めでたき御山と謂つべし、八日、山に登る、木綿しめ身に引かけ、寶冠に頭を包み、強力といふ者に道引かれて、雲霧山氣の中に、冰雪を踏みて登る事八里、更に日月行道の雲關に入るかとあやしまれ、息絶え身こゝえて、頂上に臻臻ば、日没して月あらはる、笠を鋪き、簾を枕として、臥て明くるをまち、日出でて雲消ゆれば、湯殿に下る、谷の傍に鍛冶小屋と云有、此國の鍛冶、靈水を撰びて、爰に潔齋して劍を打終り、月山と銘を切りて世に賞せらる、彼の龍泉に劍を淬とかや、○中總て此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず、仍りて筆をとめて記さず、坊に歸れば、阿闍梨の需に依りて、三山順禮の句々短冊に書く、